『夜の寝覚』の構想

生霊事件設定の意義

嵩　美由紀

目　次

序論
本論
第一章　生霊事件に至るまでの危機
第一節　男君との契り
第二節　左大将との結婚
第三節　帝闖入事件
第二章　生霊事件設定の意義
第一節　女君の愛と人生観
第二節　生霊の検証
第三節　生霊事件における女君の心理
〈生霊出現の噂を聞いて〉
〈心のほかの心〉
〈無言劇の意義〉
第四節　生霊事件の意義
第五節　生霊事件後の女君の愛と人生観
結論

序　論

平安後期物語の中で『夜の寝覚』は、『源氏物語』の強い影響を受けているにも拘らず、寝覚独自の世界を創造した物語である。

『夜の寝覚』の特徴と言われる主人公女君の心理追求のために設定された、幾つもの危機から、ここでは「生霊事件」を取り上げたい。その事件は従来、『源氏物語』の六条御息所の生霊事件と類似のものと指摘されてきた。しかし、関根慶子氏が寝覚物語の場合、源氏の生霊とは全く意味を異にする仕組まれた偽生霊であると説かれて[注1]以来、それは作品の本質にもかかわる問題として注目されている。

果たして生霊事件は、いかなる意義をもって、女君の「心」に迫るのであろうか。

（なお、テキストは、鈴木一雄氏校注・訳『夜の寝覚』（小学館）を使用した。）※引用文中の傍線・傍点は、すべて筆者に拠るものである。

第一章　生霊事件に至るまでの危機

この物語は「人の世のさまざまなるを見聞きつもるになほ寝覚の御仲らひばかり浅からぬ契りながら、よに心づくしなる例は、ありがたくもありけるかな」（39頁）という主題を提示した冒頭で始まり、その実現化が天人の予言「あはれあたら人の、いたくものを思ひ、心を乱したまふ宿世におはするかな」（44頁）により裏付けられる。こうした予言に沿って物語が進展する中で、女君は様々な危機を迎える。そこで生霊事件について考察するにあたって、まずこの事件までに女君の直面した危機を順に探ってみたい。

(1)男君との契り・女君は方違えの先で、誰とも分らない男に強引に契りを結ばれてしまう、突然の危機に遭遇する。そして彼女は、契りの相手が姉の夫であり、その上妊娠してしまった事実を知らされる。この「男君との契り」により、美しく学才に秀れ、周りの愛情と賞賛を一身に集め、高貴な家柄のお姫様として何不自由なく育まれてきた女君の状況は一変し、彼女は、これまでとは違う世界に生きることを強いられたのである。

(2)左大将との結婚・次に迎えた心進まぬ「左大将との結婚」は、湯橋啓氏の指摘されるように「（姉）大君への憚りから、徹底的に男君を拒否し続けた中君（女君）を、男君にはっきりと向かわせ、そのために一層の悲嘆を味わわせた」[注2]危機であった。宿命による偶然の事件「男君との契り」で、自らの存在が消えてしまうことを願うばかりであった女君が、ここでは、自己の本心ー男君への愛ーを発見するとともに、意志を持つ女性に成長している。

(3)帝闖入事件・続いて女君は、大皇の宮の画策で帝と二人きりの一夜を明かすという窮地に追い込まれる。帝に捕えられ思慮分別を失う女君の頭を、男君への思いがかすめた。彼女はかすかに揺れ動いていた彼への愛を再確認する。前の危機の関白、そして今回の帝と、男君とは異なる男の接近を繰り返す手法によって、女君の心理は更に深められた。

「生霊事件」で女君の「心」は、どのように変貌するであろうか。

第二章　生霊事件設定の意義

第一節　女君の愛と人生観

漸く宮中から退出を許された女君は、帝闖入事件で頼りとした男君を今更突き放すことはできず、かといって靡くこともできないで、本心と理性の対立に悩んでいた。彼女は例の如く、男君に冷たい態度をとるのだが、そこには男君への愛も支配してしまうような、彼女なりの人生に対する強い信条があったのではないだろうか。それは、生霊事件における女君の「心」を探るとき鍵となるのである。

女君の人生観は、帝闖入事件後の①「『ものの心を思ひ知りより、「何事もなどてか人に劣らむ。いかで、いみじう重りかに、恥かしく、人にすぐれても、ただなる世に過いてばや」とのみ思ひおごりしものを。…』」（346～347頁）

そして出家決意の際の②「『すこし物思ひ知られてより、「何事も人にすぐれて心にくく、世にも、いみじく有心に、深きものに思はれて、なにとなくをかしくてあらばや」と身をたてて思ひあがりしに…』」（455～456頁）という。彼女が己を振り返る描写から窺える。その人生観は、女君が自ら①「思ひおごりしものを－」②「思ひあがりしに－」と言っていることからもわかるように、幼いころから自然と培われた自負に支えられていた。

こうした信条に従って、世間一般からみても欠点の無い平穏な人生を送ろうとするとき、彼女はそれに背く浮名の源にある男君を遠ざけてきた。だが、そのような態度をみせる女君の「心」には、無意識に男君に靡いてしまったときの大きな不安も隠されていた。彼女は、幾つもの危機を乗り越える中で、野口元大氏の言われるように「予想される紛擾から、自分を守るべく慎重に計算された意志的態度」(注3)を身につけ、人生観を楯として自己を統制し傷心を守ろうとしたのである。

このように日頃は人生観に包まれたままの女君の本心を露呈するために、作者は危機を設定していると言える。「生霊事件」で女君は人生観に隠された「心」の奥底、「心のほかの心」をみつめることになる。

第二節　生霊の検証

女君は、生霊が出現するような状況に位置していたのか探ってみたい。

宮中から退出を許された女君は、生後間もなくから生き別れていた石山の姫君と再会し、それを機に男君とも睦み合い、心穏やかな毎日を送っていた。一方、人事不省の女一の宮は、女君の生霊と名のり「『あはれ、今はかくてあるべきものと思ひ頼むに、あながちに忍びつつ、わざともて出でたまはぬが、妬う、かしこき筋といひながら、内の御事の、あさましううちすさびて、行くての事にて、またともおぼし出でさせたまはぬ恥がましさも、「この御もてなしだに、わざとがましくは、もて穏し、それに思ひ消ちてむ」と思ひしに、いとあさましう、心憂きに、あくがれにし魂の来たるなり。さらに生けたてまつりたるまじ』」（406頁）と語る。そこで、当時の「生霊が真にその人の生霊かどうかの見きわめが－中略－当事者だけに身の覚えのある事実にある」(注4)らしいと言われている。しかし女君の、大皇の宮、女一の宮、帝、父君、亡夫の遺児たちに対する複雑な事情、心理描写（紙面の都合上省略する）から考えても、生霊の言葉は事実でないことがわかる。それは、生霊に直面した男君の反応からも窺える。そこで生霊の白々しさにあきれた男君が、「『ものぐるほしき孤などが名のりを、しか続け申し出でむを、まことしたまふ、いと不便に人聞き思ふらむことも、かへりてをこがましきことにさぶらふ』」（408頁）と、生霊を孤のたぶらかしとして否定し、女君を弁護している点は興味深い。「生霊・怨霊が社会的事実であったと同事に、人をおとしいれんが為の怨霊もまた社会相の一面に存した」(注5)らしいそのころの社会風潮の知れるところである。これまでの考察と、作者があらかじめ

大皇の宮に悪の影を背負わせているなどから、この事件は、右の後者の人々が生霊を信じるのを悪用したものと考えられそうだ。

こうして生霊事件は、飽くまでも表面的には大皇の宮側の画策として描かれており、その点では定説も理解できる。だが、ここで女君の心の深層を探ることで、生霊事件の持つ意味を更に追求してみたい。

第三節　生霊事件における女君の心理

〈生霊出現の噂を聞いて〉・女君は、前に述べたように喜びに満ちた日々を送る中、突然自分と名のる生霊が現れたという噂を耳にする。これまで己の信ずる人生観に従って生きてきたからこそ、彼女は「身こそ恨みめ人をつらしと思ひあくがるる魂」（412頁）など、あろうはずもないことだと考える。だが、心のほかの心ー意識できない心の奥の心ーを思うと懊悩せざるをえないのであった。女君は、生霊の噂をここではどう受けとめているのであろうか。

その問題について関根氏は、「この生霊は女君にとって『心のほかの心といふとも、あべいことにもあらぬものを』と強く否定[注6]」されていたと説かれ、野口氏は「『心のほかの心といふとも、あべいことにもあらぬものを』とかきくどく言葉は、あるはずがないと思っていたのに、それが実はあったのだ、という意想外の発見と、それからくる嘆きの切迫した表現だった[注7]」と、女君は生霊となりうる心をすぐに発見したと説かれている。しかし私は、女君の心理は、もっと複雑であったと思うのである。

そこで、帝闖入事件と生霊事件の場合を比較しながら考えたい。帝闖入事件で、女君は即、男君への愛を自認した。それは、「左大将との結婚」の際も認めた、根強く潜む彼女の本心であったことからもうなづける。だが生霊事件で対象とされるのは、女一の宮への憎悪・疑惑など女君自身許せない、全く思い当らぬ「心」だったのである。つまり、生霊となりうる感情が、女君にとって思ってもみない忌まわしいものであっただけに、野口氏の説かれるように、彼女が直ちにそれを認めたとは思えない。しかし、女君は「心のほかの心」を考えると、はっきり否定できないものがあった。だから先の「強く否定」していたとされる関根氏の説も同意し難いのである。私は、女君はここでは、偽生霊と信じつつ自己の「心のほかの心」を半信半疑でみつめていたと考えたい。そこで彼女は、「心のほかの心」を追求することより、生霊の噂を聞くことになったのも自己の責任だと反省し、男君への対応を心配するほうが、深刻であったに違いない。

自分自身の意識の外を彷徨する「心のほかの心」を女君はどのように追求するであろうか。

〈心のほかの心〉・女君の「心のほかの心」に、仮に忌まわしい感情が存在するとすれば、それは当然、男君の正妻女一の宮と、女君への愛情の対処の如何にかかわってくる。

そこで男君の生霊事件前の描写を追うと、彼は、女君を愛しながらも女一の宮も捨てられず、二方に「分くる心」（419頁）に苦しんでいたことがわかる。だとすれば、女君

の生霊が現れうる（彼女が嫉妬に悩む）条件が、女君よりも、寧ろ男君の心中に準備されていたのではないだろうかと思えるのである。女一の宮へも「心」を分ける男君の心理と態度は、女君の「心のほかの心」に忌まわしい感情を誘う要素を十分に備えていたのである。こうして男君の「心」に目を向けることで、女君の「心のほかの心」に嫉妬・憎悪の存在する可能性をみることができた。彼女の「心のほかの心」を分析してみたい。

中間欠巻部分で、男君が女一の宮を正妻として以来そのことが、女君の男君への対応に確かに大きなこだわりとなっていた。それは帝闖入事件後、執拗に迫る男君に対する彼女の「『心やましく、恨めしき節なきようにも、あべきにもあらぬを……』」（374頁）という心理には、正妻女一の宮のことが含まれていることからも明らかであろう。また、次に述べる〈無言劇〉でも「『（男君は）我よりは、こよなく浅かりける御心なりかし。さべい事の折は、人目も知らず、ただこの人の御心こそ、我は思へ』」（416～417頁）と、女君の「心のほかの心」に潜む女一の宮への嫉妬を垣間見ることができる。このようにして、女君の意識されなかった生霊になりうる感情が、「心のほかの心」に僅かながらも重なるところがあることは興味深い。だが、それが「心のほかの心」に潜むものである以上、直接女一の宮にとりつく程、激しく凄まじい嫉妬・憎悪ではなかった筈である。この事件での女君の女一の宮への優しい心遣い、そしてこれまでの女君の心理、性格、態度等からも、それは疑う余地はない。それに作者が、悲劇のヒロイン女君から、直接生霊があくがれるなどという残酷な設定は（読者を考えても）しなかったに違いない。

それならば先にみた「二方に分くる」思いに悩む男君の「心」を通して、生霊が現れたと考えることはできないだろうか。生霊は、二度とも男君の眼前に出現している。そこで再び男君の心理を追求し、生霊の真相を考察したい。

男君は、最愛の人女君がありながら女一の宮と結婚したことを思うと、「胸ふたがりて、『なぞせしわざぞ』と、いみじううち嘆」（357頁）き後悔する。そして「人目ばかり心を分けむことの、いとわりなくおぼえつつ……」（358頁）と、彼は女一の宮は世間体の妻にすぎないと考えるのであった。それで、女一の宮のもとにいても「『我が身は、いみじう苦しからむずるわざかな。こなた（女一の宮）かしこしとても、かの人（女君）に、つゆも恨めしく思はれて、はた、世にあべうもあらずは』」（367頁）と、女君を慕う描写もみられた。男君は、そうした自己を振り返り、女君恋しさ故に慰むこともあろうかと女一の宮と結婚したが、「慰むかたなかりし」（447頁）どころか、大皇の宮の策謀までうけ、女君とうまくいきそうなときになってその「本意の事逆へられたるは妬く心憂きわざかな」（同）と嘆くのであった。以上の考察からもここでの男君の「妬く」と表現された感情の源には、女君との仲において障害となる女一の宮の存在に対する恨みが占められていたことは確かである。つまり、男君は明らかに女一の

宮に満足していなかったと言える。それに彼の心中には、正妻女一の宮にかかわる女君への良心の呵責や、女君の心理とどこかで一致する女一の宮への憎悪等が絡み合っていた。そして、彼はこれまで、女君の「あらまし事には涙をさへこぼしつつ、さぞおぼすらむの推し量りごとを恨み」（380頁）、彼女のありもしない感情まで忖度し、追求してきた。だから前に触れた複雑な男君の「心」は、女君の女一の宮への嫉妬・憎悪も、それ以上に感じ取っていたに違いない。

こうして女君の「心のほかの心」の忌まわしい感情は、彼女の意識しないところで、右の「身に添ふ魂もなき心地」（420頁）の男君に引き寄せられ、彼の「心」で様々に重なり合って生霊となって現れたのではないかと、定説とは異なる方向から解釈することもできるのであった。以上は私見にすぎないが、生霊が曖昧なものであったために、男君、女君の本心が暴かれたのは重要であった。生霊は女君の「心」、男君の「心」とどこかで一致する部分を持って、作品中にうまく融け込んでいるのである。

女君を更に深刻に「心のほかの心」に向かわせる契機となる〈無言劇〉を通しての、彼女の心理を分析してみたい。

〈無言劇の意義〉・生霊出現後、男君と女君は互いに心を推し量りながらも相手の思いを汲み得ず、二人の心は微妙に擦れ違い、関根氏の言われる「無言劇」が繰り広げられる。そこにおける女君の微妙な心理の変貌に注目したい。

男君は、生霊を目の前にしても女君への労りから、その話題には触れずさりげなく振舞った。しかし女君は、自分の潔白を信じているならば男君は、生霊について「『さる事こそあれ』と、うち笑ひも、あさみも」（416頁）して話すに違いないと確信していたため、大きなショックを受け悩みもいよいよ痛切となる。その上、心揺らぐ彼女に追い討ちをかけるように、第二の生霊が出現するが、男君はまたしても彼女への心遣いから生霊のことを口にしない。女君は、男君は生霊を「『深くまことおぼすなめり』」（422頁）と思い込み、正に衝撃を受ける。富成碩甫氏の指摘されるように、女君の「心」は、「男君の態度のいかんによっては、直ちにでも消え入り得るほどの不安定な」（注8）ものであったと言えるだろう。

先に、懊悩しながらもそれほど問題にしていなかったと考えた「心のほかの心」を、女君は再確認せざるをえなくなる。そして、彼女もついには「『この人（男君）のほのめいたまふたびごとに乱るる心、今や今やあくがれ寄らむとこそ、我ながらゆゆしけれど…』」（423頁）と、自己の潔白への確信も揺らいでしまうのであった。右の独白の部分に、「ヒロイン（女君）は生霊を完全に肯定してしまう…」（注9）様が窺えると富成氏は説かれる。しかし私は、心は大きく揺れるとも女君は、生霊を肯定することも、また否定してしまうこともできず、つまり「偽」であると信じつつはっきりつかむことができなかったからこそ、悲嘆を尽くすことになったと考えたい。

長い心の行き違いにより展開した「無言劇」によって、

女君は「心のほかの心」を疑い、追求した。そして決定的に辛い宿世を思い知り厭世的になって、出家の決意を固めるのであった。

第四節　生霊事件の意義

女君の「心」を追求してきたが、結局彼女は生霊をどう受けとめていたのであろうか。生霊事件の意義を考えるとき鍵となる右の問題について、女君は生霊を「強く否定」(注10)していたとされる関根氏の説と、それに対する「生霊が女君にとってこの上もなくレアルな否定したくとも、どうしても否定しきれぬ実存として意識されている」(注11)とされる野口氏の説が著名である。だが私は、二者のほぼ中間とみられる石埜敬子氏の「作者の心理主義的なリアリズムは、女君に時に己の生霊を偽りと確信させ、時に真実かと疑わせつつ、結局、結論を必要としない」(注12)とされる説に注目したい。というのは、生霊の正体が明らかにされない今回の事件で女君は、煩悶を深めながらも半信半疑で己の内面を掘り下げることによって、これまでにない真刻な自己分析を可能なものにしたと考えるからである。つまり生霊事件は、女君に「心のほかの心」まで追求させ、更に心理的成長を遂げさせたという意味を持っていたのである。

また先に触れたように、女君は出家を決意したがその願いは断たれ、その後始めて男君と共に暮すことになる。こうして、二人の合流へと事態を転換させたわけで、作品の展開においても、重要な意味を含んだ危機であったと言える。

第五節　生霊事件後の女君の愛と人生観

生霊事件後女君は、巻五の冒頭で「『世とともに、いみじと思ひくだけ、あはつけうよからぬ名のみ流して、人にも言はれそしられ、世のもどきをとる身にてのみ過すは、いみじく心憂く、あぢきなうもあるかな』」(455～456頁)と、人生観に背いた悲惨な我が身を嘆いている。第一節において考察した「女君の愛と人生観」は、この事件を経てどのように変ったであろうか。出家を思いとどめた女君と共に暮す男君は、幸福に浸っていた。しかし、相次ぐ危機を乗り越え経験を積んだ女君は、男君への愛における結論とも言える、微妙な心理をみせる。

漸く外からの障害がなくなると、女君からみた男君は、「心劣りしたまふべき人ぞかし」(512頁)と思われる程、心に描いていた男君とは隔たりがあったことがわかる。そして男君と暮しながらも女君は、彼を「かりそめのよそものに思ひ放」(534頁)ち、今は亡き夫の愛を身にしみて実感するばかりであった。彼女は「『ほのかなりしを、かけはなれて思ひ出でこそ』」(512頁)、つまり、遠く離れて定かでない関係で、不可能な愛である程男君を愛してきた趣もないではない。それは、亡き夫をしきりに慕い、また危機に直面することで男君への思いを発見するといった女君の心理に、通じるところがある。

しかし、女君のそうした愛の対処に加えて当の男君に目を向けると、彼女の和みかけていた男君への思いが薄れるのも、当然と思える。女君が、危機に直面しながらも人間として女として、見事に成長しているのに対し、押しつけ

がましい愛情といい、執拗な嫉妬心といい、男君はほとんど若き日のままであった。しかも今では、女君も女一の宮も我が物顔に公然と通い、それを「『我なればこそ』」（534頁）と自賛する「あながちなる御心ざし」（550頁）の男君である。女君はそうした男君を「『こよなき御心の程なりかし』」（562頁）、「『御心のけぢめもなかりけるをや』」（563頁）と批判し、彼への愛は冷却してしまうのであった。心理的に成長した女君の意志の強さがとらせた態度と言えるであろう。

これまで成長の過程で女君は、いつも自己の不徹底な生き方をどうすることもできないで、苦しみ嘆いていた。しかし彼女は、少なくとも意識の範囲内で、強靱な意志を曲げることを決して許さなかった。寝覚のヒロインゆえに女君は、常に自己の人生を一つの念いで貫こうとしたのである。

結論

生霊事件は、作者の意図として、読者にも女君にも曖昧に受けとめられるものであったと、定説とは異なる方向から解釈した。生霊の真相が明らかにされないことで、女君は一層煩悶したが、そのために自己の深層を追求し、第一部からは想像もつかぬ程の心理的成長を遂げたのである。そこにおける女君の心理展開は、富成氏が「（生霊の噂を聞き）その悲嘆からくるヒロインの心中での葛藤の様は、この物語の一特色である心理描写により、鮮かに写し出されており、その見事さは、他の物語に類を見ない」[注13]と賞賛されるように、すばらしいものであった。

こうして『源氏物語』の影響を受けながらも女君の「心」を執拗なまでに追い求め、独自の世界を持つに至った『夜の寝覚』において、女君を成長させる一つの契機として設定された「生霊事件」は、重要な意義を持ってその成果を収め、今なお、解釈の余地を残して注目されているのである。

注1、5、6、10　関根慶子氏「寝覚」の生霊をめぐって－偽生霊とその位相－（平安文学研究昭37・11）

注2　湯橋啓氏・寝覚物語の女主人公の家族－父君と大君と－（「国文」第四十二号）

注3、7、11　野口元大氏『夜の寝覚』の主題と構造－「夜の寝覚　たゆるよなくとぞ」・（上）（下）〈文学昭42・4・5〉

注4　永井和子氏『夜の寝覚の構造』（「平安文学研究」昭35・11）

注8、9、13　富成碩甫氏　夜の寝覚論－ヒロインの生霊肯定について（「国語国文学研究」（熊本大学）昭43・12）

注12　石埜敬子氏「夜の寝覚」の作風（「平安時代の和歌と物語」・所収・桜風社）

（三十二回生）